

# 関西大学高等部・中等部 2016年度学校評価報告書



2017年3月

# 目 次

1. 本校の概要.....	1
2. 今年度の重点目標における取組計画・内容、自己評価及び今後の改善方策 .....	1
3. アンケートの実施状況について .....	9
4. アンケート結果の分析 .....	10
5. 学校関係者評価委員会からの評価結果 .....	14
6. 校長の意見書.....	15
7. アンケート結果.....	16

## 1 本校の概要

### (1) 沿革

2010 年 4 月に高槻ミューズキャンパスの地に初等部からの一貫教育をめざして、中等部 3 クラス、高等部 4 クラスが開校。施設設備面では教室に電子黒板が標準装備され、マルチメディア教室をはじめ PC、iPad も多数用意され、最新の ICT 教育環境が整っている。中等部では週 7 時間の英語と「考える科」による思考力の育成を特徴としている。一方、2014 年に文部科学省からスーパーグローバルハイスクール (SGH) として採択を受けると共に、高等部ではプロジェクト学習による探究力の育成を特徴としている。

現在、初等部からの内部進学生を中等部に迎えて 3 年目、開校当初の単独校種による教育活動の展開から、中高 6 年・初中高 12 年一貫教育のための教育活動へと、昨年度と同様にこれまでの取組を修正する大きな過渡期にある。

### (2) 建学の精神、教育理念・教育方針・教育目標等

関西大学の教育理念である「学の実化」に基づき、「学理と実際との調和」を基本とする独自の教育を展開し、一貫教育を通じて「確かな学力」「国際理解力」「情感豊かな心」「健やかな体」「高い人間力」を育てることを本校の教育理念としている。

## 2 今年度の重点目標における取組計画・内容、自己評価及び今後の改善方策

### (1) 重点目標①：初中高一貫教育の後半を担い、確かな学力を養うことによって、各自の進路希望を実現させる

達成状況の目安：(◎)大幅達成・(○)達成・(△)未達成・(×)大幅未達成

取組計画及び評価指標(Plan)	自己評価
<p>ア 中等部では「5 教科学力の底上げ」と「家庭学習習慣の定着」のため、課題→点検→確認テストを実践。学習規律を中等部で定着させる。</p> <p>イ 中等部 1、2 年生に関する学習生活実態データを分析し、中等部の教育活動を修正改良する。</p> <p>【評価指標】</p>	<p>【取組状況(Do)】</p> <p>アについては、課題→点検→確認テストの流れで各科目の授業において実践している。学年では学力低位および課題提出状況不良の者の抽出を定期的に行い、家庭連絡を密にし居残り指導を強めるなど丁寧に取り組んだ。</p> <p>イについては、中等部学力推移調査の学習実態データを毎回学年毎に集約し、学年から教科担当者に情報提供することを実践している。</p> <p>中等部の教育活動の改良については、成績の上下差が大きい数学・英語を中心に、演習時間や放課後の補習を利用した個別指導を取り入れた。</p>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中等部生徒の学力推移調査データにおける平日の学習時間1時間未満、休日の学習時間2時間未満生徒が20%以下</li> <li>・ 生徒アンケート「授業で学力がついていると感じる」「家庭学習習慣は身につけている」でのプラス評価70%以上</li> </ul>	<p><b>【達成状況(Check)】 (△)</b></p> <p>家庭学習時間については、中等部学力推移調査のデータでは、平日の家庭学習時間が1時間未満の者は、中1年13%、中2年30.9%。休日の家庭学習時間が2時間未満の者は、中1年22%、中2年49%。3時間以上の者は中1年57%、中2年29%であった。学力の上下差と同様に家庭学習時間にも二極化が見られ、未だ学習習慣のついていない一定層を改善できていない。</p> <p>学校生活アンケート「授業で学力がついていると感じる」のプラス評価は、中1年64.3%、中2年77.3%、中3年74.8%。「学習規律と課題にまじめに取り組み、家庭学習習慣は身につけている」のプラス評価は、中1年61.8% (昨年比↓2.1%) 中2年79.1% (昨年比↑10.9%) 中3年77.7% (昨年比↑11.1%) であった。授業と課題に対する意識は向上しているが、特に中2において休日家庭学習がダウンした点は、授業レベルの見直しが必要である。</p> <p><b>【今後の改善方策(Action)】</b></p> <p>家庭学習習慣は入学前の習慣が大きく影響しており、一律短期間で変えられるものではない。中2年での休日家庭学習習慣を向上させる指導に力を入れたい。科目担当者による課題→点検→確認テストの地道な取組の継続とともに、授業改善によって家庭学習(予習復習)の有効性を生徒に理解させる。定期考査後の答案解説や模試後の面談の機会に、具体的な指示をできるだけ個別に伝えることによって、生徒の家庭学習に対する意識を変えていきたい。</p>
<p>ウ 高等部では「自主学習習慣の定着」のため、目標到達ラインを意識させた具体的な学習指導を行う。</p> <p><b>【評価指標】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒アンケート「授業で学力がついていると感じる」「家庭学習習慣は身につけている」「模試後の面談は役立つ」でのプラス評価70%以上</li> <li>・ スタディーサポート(以下、「スタサポ」という。)の2</li> </ul>	<p style="text-align: center;">自己評価</p> <p><b>【取組状況(Do)】</b></p> <p>本年度は7/9に高等部保護者対象大学入試説明会、7/14に高2・3年生の難関国立大志望者対象に大学入試説明会を実施。スタサポは1・2年に4月9月の2回実施。</p> <p>模試後の面談では個人成績票の読み取り方や教科別に克服すべき単元の指摘などを担任が丁寧に行った。</p> <p>高1年国立クラス希望生徒へは、進路指導部が中心となって放課後にガイダンスを行った。</p> <p><b>【達成状況(Check)】 (○)</b></p> <p>学校生活アンケートでのプラス評価は、「授業で学力がついていると感じる」高1年73.1% (昨年比↓2.2%)、高2年70.1% (昨年比↑0.3%)、高3年64.8% (昨年比</p>

<p>回実施及び高1の家庭学習時間の増減を指標とする</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>高1年国立クラス希望者に対するガイダンスの実施</li> <li>関大内部進学希望者100%合格、難関国立大10名合格</li> </ul>	<p>↑7.8%)。「学習規律と課題にまじめに取り組み、家庭学習習慣は身につけている」高1年76.6%(昨年比↑8.4%)高2年63.9%(昨年比↓2.3%)高3年64.8%(昨年比↓2.1%)であった。「模試後の面談は役立つ」高1年71.7%(昨年と同じ)高2年65.9%(昨年比↓4.5%)高3年61.3%(昨年比↓8.4%)と、いずれも若干目標数値に及ばなかった。</p> <p>高1スタサポ4月9月の比較では、学習習慣定着型の生徒は26.6%(39人)から31.7%(46人)と若干の増加に止まっている。</p> <p>進路実績では、本年度の関西大学への内部進学は希望者が全員合格。難関国立大の合格発表では、京大2、阪大4、神大7、九大・筑波各1名をはじめ難関国公立大に17名合格と過去最高の結果であった。</p> <p>アンケートのプラス評価は70%の目標に届いていない部分もあるが、高3の進路結果から考えれば指導の成果は出ている。生徒の具体的な学習目標や課題の明確化につながるため、「模試後の面談の有効性」についてのプラス評価を上げることが肝要であると考えます。</p> <p><b>【今後の改善方策(Action)】</b></p> <p>高校に進学し大学入試が目標として現実感を持ってくる実情を踏まえ、点数と偏差値だけではない大学入試情報を生徒に早い段階から計画的に周知していく。</p> <p>前期第1中間考査後の答案返却時に改めて授業ガイダンスを行い、予習が必要な科目・復習が有効な科目を生徒に理解させる取組を1、2年で行うことで、家庭での学習を自主学習の時間に変えていきたい。</p>
--	---

(2) 重点目標②：関西大学の併設校出身であることにプライドを持ち、国際的な視野と思考力・探究力を備えた「関西大学への推薦にふさわしい人物」の育成

取組計画及び評価指標(Plan)	自己評価
<p>ア 関西大学への帰属意識を高め、部活動の部員を中心に規律と品格のある生徒集団を育成する。</p> <p>イ 生徒・保護者の関西大学への理解を深め、関大志望者の育成に努める。</p>	<p><b>【取組状況(Do)】</b></p> <p>部活動顧問会議を年間5回ほど開き、部員の規律意識や関大の一員としての帰属意識指導を再確認してきた。学校説明会では、運動部員から会場の受付・誘導ボランティアを募り、一般来校者の前に立つことで関大の一員であることを自覚する機会とした。部活動の部長ミーティングは定例化できていない。</p>

ウ 中高と関大との連携行事における質的な充実を図る。

【評価指標】

- ・ 生徒アンケート「規範意識が昨年より向上」「関大生としての自覚」でのプラス評価 70%以上
- ・ 保護者アンケート「生徒としてのマナーやモラルを向上させる取組が行われている」「学校同士の教育連携が積極的に行われている」でのプラス評価 70%以上

中高1年生の宿泊研修では、関西大学への理解を目的とした講座を実施。関西大学との連携授業に加え、千里山キャンパスでのフィールドワーク、総合関関戦の試合応援、体育祭における大学応援団本部の指導による演舞など、学校行事に関大理解の要素を定着させた。中3生対象に1～2月「達人講座」を開き、社会の各方面で活躍する関大OBから数回の講演も実施した。保護者に対する関大理解の取組は、11月に千里山キャンパスツアーを実施し51名が参加し好評を得た。

【達成状況(Check)】 (△)

学校生活アンケートの生徒プラス評価は、「規範意識が昨年より向上」中1年 64.2% (昨年比↑6.0%) 中2年 73.6% (昨年比↓1.0%) 中3年 55.4% (昨年比↓17.5%)、高1年 62.1% (昨年比↓10%) 高2年 66.0% (昨年比↑4.9%) 高3年 57.9% (昨年比↓6.2%)

「関大生としての自覚」中1年 86.2% (昨年比↑5.3%) 中2年 87.2% (昨年比↑2.9%) 中3年 76.7% (昨年比↓9.6%)、高1年 82.0% (昨年比↑10.4%) 高2年 70.8% (昨年比↓3.0%) 高3年 67.6% (昨年比↓8.5%)

学校生活アンケートの保護者プラス評価は、「生徒としてのマナーやモラルを向上させる取組が行われている」中平均 75.9% (昨年比↓5.7%) 高平均 87.7% (昨年比↓0.1%) 「学校同士の教育連携が積極的に行われている」中平均 67.5% (昨年比↓6.5%) 高平均 81.8% (昨年比↑1.3%)。

中高一貫で考えれば、学年が上がっていくにつれて規範意識や関大生の自覚のプラス評価が下がっていくことは、重大な問題である。学校生活は落ち着いているので、規範意識を昨年比で見るとは実態はよい。一方、生徒の中に関大に対するブランドイメージが理解されず帰属意識がまだまだ低い現状は、関大からの生徒への情報量が足りないことも原因の一つである。行事的なものを増やすのではなく、生徒に提供する質的な部分を改善することが必要である。

	<p>【今後の改善方策(Action)】</p> <p>学校生活アンケート「関大生としての自覚」では、中高いずれも3年生の意識が低い点の改善を最重要課題としなければならない。経年変化を見てみると、中3生は中1年86.9%、中2年で84.3%であったものが今年76.7%と下がっている。同様に高3生も1年次には83.6%であったが、2年で73.8%、今年67.6%と年々下降している。これは学校生活への「慣れ」が引き起こした数値であろう。</p> <p>全校集会または学年集会で全体に指導する機会を増やし、社会の中での関大に対する評価について、教学からの情報をもとに生徒に伝える活動を強めたい。高等部から関大へ進学した卒業生や教育実習生に大学生活を語ってもらう機会や、春の部活動紹介と夏季および冬季休業前の機会に部長ミーティングを定期開催し、活動時間と体調管理等について自律性を指導していきたい。</p>
<p>エ 各種学校行事の企画運営において、生徒の自主性発揮の目標を定め、生徒に委ねる部分を学年毎に段階を追って広げる指導</p> <p>【評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国際交流委員、ICT委員の活動内容と活動回数</li> <li>・ 体育祭、文化祭の実行委員会でのスタッフ生徒による行事運営</li> <li>・ 生徒アンケート「先生とのコミュニケーションがとれている」でのプラス評価70%以上</li> </ul>	<p>自己評価</p> <p>【取組状況(Do)】</p> <p>iPadを導入した中等部では、生徒による自主的なルールづくりと適切な活用法をめざした生徒による中等部ICT委員会が、生徒会とタイアップして全校生徒対象の研修会を5月「SNSのいい使い方-私たちの考え」、3月「SNSモラル」を実施した。ICT委員会では毎週1回のランチミーティング(年間約35回)を開き、中等部各クラス2名の計18名が活発に活動した。</p> <p>台湾師範大附属中高、シンガポールホワチョン校からの短期交換留学生の来訪時には積極的に国際交流委員会(中高39名)がホスト役を務め、文化祭でも英国研修等の報告展示を担当するなど活動の場を広げた。</p> <p>本年度の体育祭、文化祭でも生徒による企画委員会・生徒会執行部が、前年度よりも更に活動を充実改善させた。教員側は生徒会・行事担当主任を中心に、生徒との協議をしっかりと行いスタッフ生徒の自覚と責任感を高め、適度な距離感を保ちながら生徒に運営を委ねた。</p> <p>学校説明会スタッフ生徒、文化祭における一般公開での体験プログラムの補助、ウィンターウォーク運営補助など、生徒が企画運営の経験を積む機会も増えている。</p>

	<p>【達成状況(Check)】 (○)</p> <p>上記の活動状況に見られる如く、各委員が主体的に行事を企画運営し、十分な成果を収めていると考える。</p> <p>学校アンケート「先生とのコミュニケーションがとれている」のプラス評価は、中1年 56.9% (昨年比↑1.4%) 中2年 73.7% (昨年比↓3.9%) 中3年 66.0% (昨年比↓6.0%)、高1年 72.4% (昨年比↑9.6%) 高2年 65.3% (昨年比↑3.6%) 高3年 60.7% (昨年比↓10.2%) と、目標数値 70%には達していないが、このアンケート項目は、所謂生活指導面でのコミュニケーションという側面も含まれていることを考慮して数値を受け止めるべきものである。各種学校行事を生徒の自主性発揮の機会とすることは、広く生徒全体に理解されており、とりわけ文化祭体育祭での各委員長の挨拶の言葉には「生徒主体の自負」が述べられ、参観した保護者の感想からも本校の姿勢は十分理解されている。</p> <p>【今後の改善方策(Action)】</p> <p>中等部3年生の自覚と自主性を促すため活動の機会を更に設け、中等部段階での成長ステップを生徒に確認させたい。そのために中等部生徒会と委員会活動の刷新を図り、フィールドワークや研修旅行を通じてのリーダー生徒を学年で意識して育成する。</p> <p>次年度からは高等部にも ICT 委員を新設し、中等部からの活動を継承する。</p>
--	---

(3) 重点目標③：初等部からの内部進学を円滑に進め、中高から大学への内部進学指導をより実態に即し充実させる

取組計画及び評価指標(Plan)	自己評価
<p>ア 初等部への学校説明会の内容を精査し、初等部教員・保護者への中高等部理解を進める。</p> <p>イ 中1、2年の学校生活や学習状況を学力推移調査アンケート等により分析し、学年毎の傾向や課題を把握し改善点を検討する。</p>	<p>【取組状況(Do)】</p> <p>初等部5・6年の保護者対象に内容を改善して例年通り学校説明会を実施。本年度初等部校長との校長懇談会を年間5回開き、初等部保護者に対する訴求ポイント、中等部内部進学生績と生徒情報について報告協議した。</p> <p>初等部中等部の教頭・教務主任による初中連携の定例会議、初中連携行事(百人一首大会・初等部研究大会での公開授業・初等部6年生に対する体験授業)は定着したが、初等部中等部相互の情報伝達(主に内進生に関する生徒情報)が十分ではない現状がある。</p>



<p><b>【評価指標】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 初中連携行事の時期と内容の見直し</li> <li>・ 初中管理職による年間3回以上の連携会議の実施</li> <li>・ 生徒アンケート「中大・高大での教育連携がある」「関大に関する情報が増え、大学進学モチベーションが上がる」でのプラス評価70%以上</li> </ul>	<p><b>【達成状況(Check)】</b> (△)</p> <p>初中校長による5回の連携会議では、5月保護者向け内部進学説明会の内容協議、3月内部進学児童に関する引き継ぎ事項の会議開催と申し送り事項の文書化が実施された。初等部研究大会における中等部考える科の公開授業を2学年で実施、初等部6年生に対する英語体験授業の秋実施が整った。</p> <p>学校アンケートのプラス評価では、「中大・高大での教育連携がある」中1年64.2%（昨年比↓8.7%）中2年79.1%（昨年比↑0.5%）中3年70.9%（昨年比↓10.1%）</p> <p>「関大に関する情報が増え、大学進学モチベーションが上がる」中1年50.4%（昨年比↑5.0%）中2年61.0%（昨年比↑14.7%）中3年45.6%（昨年比↓18.4%）</p> <p>初等部からの内部進学1期生である中等部3年生だけが持つ関大や中等部に対する感覚（初等部との比較感）は、最後まで払拭できなかったことは残念である。中学生と関大との連携は、大学に対する進路意識が遠いこともあり、中大連携授業だけでは情報不足であった。</p>
<p>ウ 中3生の高等部への内部進学者数の確保と、内進決定後の教育活動の工夫改善</p> <p>エ 高等部1年における内部進学者アドバンスクラスに対する進路指導の構築</p> <p>オ 「高1、2プロジェクト学習」における関大各学部との連携行事の拡大</p>	<p style="text-align: center;">自己評価</p> <p><b>【取組状況(Do)】</b></p> <p>中3生に対する従来までの内部進学指導を行ったが、初等部からの進学者にとっては7年間を本キャンパスで過ごすこととなり、高等部進学モチベーションアップに結びつけられなかった。</p> <p>高1アドバンスクラスの指導は、進路意識の持たせ方と学習環境の整備ともに担任、教科担当者の共通理解の下に行われた。</p>

**【評価指標】**

- ・ 中3の内部進学者数100名以上
- ・ 理系希望者に対する綿密な面談の実施による適正人数の確保（50名前後）
- ・ 生徒アンケート「中大・高大での教育連携がある」「関大に関する情報が増えた」でのプラス評価70%以上
- ・ 「高1、2プロジェクト学習」での関大研究室訪問の実施（新規）

高1・2プロジェクト学習における関大各学部との連携は、8学部で関大研究室訪問を実施することができ、生徒の探究活動に対する意識や研究テーマ設定のための考え方に大変有効であった。研究室の空間は大学での学びを実感させることもできた。

**【達成状況(Check)】** (△)

中等部から高等部への内部進学者数は、本年度85名となり20名近く辞退者が発生し、高等部定員を一般入試によって補填する事態となった。

高1では内部進学者対象にアドバンスクラスを設け、学習環境の整備（中等部3年間でついた習熟度差を考慮したクラス編制）によって、アドバンスクラス・普通クラスとも模試データをみると向上している。理系選択者は最終55名と若干多めではあるが、許容範囲内であった。

学校アンケートのプラス評価では、「中大・高大での教育連携がある」高1年78.7%（昨年比↓4.9%）高2年72.9%（昨年比↓4.8%）高3年71.0%（昨年比↑7.0%）。  
「関大に関する情報が増え、大学進学モチベーションが上がる」高1年60.7%（昨年比↓16.2%）高2年65.3%（昨年比↓5.1%）高3年64.8%（昨年比↓0.7%）

中等部3年生は初等部からの内部進学1期生であることから、7年間学んだこのキャンパスから外へ出たい思いもあったようである。高等部生徒のプラス評価が中等部生に伝わらないところに教員側での中高連携の課題を感じる。

**【今後の改善方策(Action)】**

初中高大の連携と内部進学制度は密接に結びつくことは言うまでもないが、内部進学が校長推薦による全入であるか何等かの条件が付されるかによって、連携の意図するところが異なってくる。

初から中への内部進学は全入であるため、受入側の中等部としては初等部との連携を、学習内容やその到達度に関する協議及び入学生徒の学校生活に関する申し送り事項に重点を置いたものに整備する。既に本年度末に初6年と中1年の担任団による情報交換の場を予定している。

中から高への内部進学では、6年一貫のカリキュラムと授業担当者の相互乗り入れの中での連携となるため、出欠状況と学習成績に関する要件を見据えた学習指導と生徒指導に重点を置いたものとなる。本年度の反省に立てば、中

	<p>等部の学年団が高等部の内容を、高等部教員が関西大学の学部内容を生徒に十分語れるように、相互理解のための教員研修や情報提供に努める必要がある。次年度からは入試広報部に校内情報の集約を担ってもらい、中等部の年間予定に組み込んで学年集会・保護者集会で高等部説明を行うものとする。また、関西大学各学部の情報を積極的に入手し、関関同立での学部比較などによって生徒の関大に対するモチベーションを高める情報提供に努める。</p>
--	--

### ○ 今年度の教育活動状況

中等部生の学校生活への満足度は、中1年生が77.3%と若干下がったが、中2・中3いずれも高く、学校生活を楽しく感じている生徒は各80%を超えている。初等部からの内部進学生が中等部の全学年に在籍する本年度も、集団の学習成績推移や学校生活状況を注意深く見守ってきた。学習面では、何よりも学習規律（特に家庭学習習慣）を定着させることが、入学後の伸びにつながる大きな鍵となっている。定期考査や模試の得点分布を見ると、中1、2年生では家庭学習習慣の定着の違いが、学習内容の習得度に影響している。小学校段階での学習習慣（提出物や課題に対する意識）の低い生徒を、入学後いかに意識改革させることができるかが、指導の課題となっている。学校生活全般における初等部との連携の密度を上げていくことで対応したい。

高等部の現状は、各学年いずれも学校生活への満足度は高1年93.1%、2年84.8%、3年86.2%と高い。SGHの取組では、1年生2年生ともに関大研究室訪問プログラムを実施し、課題研究テーマで分けた高等部生のゼミを1年段階から編成し、テーマに沿った活動を充実させることができた。9月末の文部科学省中間評価でも「国内外のフィールドワークをうまく組み合わせ、思考法・議論の仕方・文献分析・グループ交流といった一連の流れが構築されている」と評価していただいている。11月の中間報告会では、昨年度より生徒が主体的に取り組む姿を披露することができ、関西大学教育推進部とのコラボによる思考力評価法の研究にも一定の成果を得ることができた。学校生活全般では、生徒会を中心に体育祭・文化祭での生徒委員による自主的な運営が板につき、後輩に対して自律自主の具体像を示している。学習面では、高1年において中等部内部進学生で一定の成績以上にある者（希望者）をA組とし、BC組と分けた。これは生徒の理解度に合ったレベルと進度で授業が行われる環境を整え、学年全体での学力の底上げを狙ったものである。その結果、模試偏差値の下限值が45前後に上がり、4月と8月末に実施したスタディーサポート（基礎学力調査）では、BC組とも3教科総合でB1→A3、A組においてもA1→S3に上がっている。中高6年間では基礎力の固め直しのための期間が必要であることを改めて認識している。

### 3 アンケートの実施状況について

本年度の学校評価活動方針案は、4月18日の自己点検・評価委員会です承され、6月8日の

職員会議で発表した。関西大学自己点検・評価委員会併設校部門委員会実施要項の内容に関しては、本校の実情に合わせて以下のような評価活動を実施した。

	項目	中等部・高等部
共通方針	組織面の自己評価	10月24日の自己点検・評価委員会で各主任に対して部署としての自己点検・評価を依頼。 11月9日職員会議において、全教員による「組織面の自己点検・評価」アンケートを実施。
	学校関係者評価	学校関係者評価委員会を開催し、実施している。
	第三者評価	外部評価委員会に委ねる。
相違点	教員個人による自己点検・評価	教員評価制度の活用により、学校運営、学ぶ力の育成、自立・自己実現支援における目標を各教員が設定し、自己申告による評価及び校長面談を実施している。
	児童・生徒の評価	11月中旬に中等部・高等部ともに「学校生活全般」に関するアンケートに学校評価共通項目を盛り込んで実施。
	保護者の評価	11月10日中高等部の全保護者を対象に実施。

#### 4 アンケート結果の分析

##### ○ 学校全般

No.1「学校生活は楽しい」は、中等部平均85.9%（保護者82.5%）高等部平均88.0%（保護者85.8%）。No.2「入学の満足度」では、中1年は77.3%（保護者78.6%）高1年は77.3%（保護者80.5%）が入学して良かったと感じている。卒業の年にあたる中高3年生の満足度は、中3年85.4%（保護者82.6%）高3年77.3%（保護者78.9%）と、昨年度よりは若干下がったものの今年度も高等部への内部進学や大学進路が未定の11月段階でも高い数値が得られた。

No.3私学の独自性「建学の精神や教育方針の理解」においては、中等部生徒の理解が平均62.8%高等部生徒は平均60.8%（中等部保護者83.9%、高等部保護者85.3%）と下がっている。学年別に見ると、初等部からの内部進学生が半分を占める中1生で62.6%と昨年度より6.2%上がったが、中1年保護者のプラス評価は79.6%（↓11.4%）と下がっている。この原因は以下の数点にあると考えている。

- (1) 中等部へは進学するが当初から外部の高校へ進学する意向であった。これは関大にない医学部等への進学志望者ととともに、ミューズキャンパスで初等から中高まで同一の環境となることに閉塞感を持ち、府立のトップ高進学をめざし塾に通っていた者が多くあり、塾での指導に影響を受けたことも考えられる。
- (2) 本年度本校は後述するように校務組織の改編を行い、中3担任に新任の常勤講師を配置したことや高等部の学年主任を廃したことが、中3保護者の不安を高めたようである。この学年の生徒・保護者は初等部1期生として中等部へ内部進学してきた学年であるため、中等部でのクラス分けテスト（中入試問題）のデータをはじめ、初等部時代の学習や成績と中等部での学習や成績にギャップを体験し、学校に対する不安と不満をより感じていた側面もある。

(3) 本校の中等部から高等部への内部進学に対する進路指導が不十分であった。中等部では開校以来、高等部への内部進学率 90%以上であったことから、入学生は当然の如く高等部へ進んでくるものと思ひ込み、中等部時代は出欠と学習成績の内部進学要件を充たすことのみに関心を払い、十分な内部進学指導を行ってこなかった。

今後の対策では喫緊のものとして、中等部への内部進学に関する指導を担う初等部とも連携し、中等部進学に際しては中高 6 年間で前提としたものであることをより保護者に理解してもらうよう努めたい。中等部では高等部の学習と生活に加えて、関西大学に対する理解を進める内部進学指導を年間計画的に取り組む必要がある。中等部の担任が高等部についてしっかりと語れる状態にするためには、中 1 から高 3 まで学年団が持ち上がって卒業させる経験を教員が持つことにあるが、時間もかかり未だ体制も十分に整っていない。まずは、入試広報部から中等部学年集会等で高等部の説明を実施したい。また、初等部段階から塾に通わなければならない実態に対して、初等部で分析を行ってもらい、中等部各教科との連携を充実させていきたい。

## ① 学校運営

No. 4 の今年度の学校運営に関しては、本年度より部長を新設して業務の担当責任と指示系統の明確化を目的とした組織改編を行ったことに対する教員からの評価である。開校以来、学年団と分掌業務を分離して教員の兼務負担を減らしてきたが、世代交代を見据えると現在の分掌主任が退職した場合、新の主任は分掌業務の経験がない中での就任となり業務の停滞が予想される。よって、本年度からの組織改編は、敢えて担任と部の兼務を改編のベースとし、分掌専属教員に専任教員を厚く配置し分掌業務を理解する専任教員の増加を意図した。やむを得ず人件費上の制約から高等部学年主任を廃止し、部長ポストを主幹教員的に置くこととしたが、高等部の学年団には業務遂行上の不自由をおかけした。また、本校単体での経営上の課題も取り上げられ、シビアな議論をした結果、校務運営委員会・職員会議の議事進行がスムーズに進まず、マイナス評価が「会議の効率的な運営」55.5%（昨年比↑17.2%）、「教員間連携」48.9%（昨年比↑12.8%）、「管理職との相互理解と信頼関係」73.3%（昨年比↑35.0%）と大幅に増えた。

No. 5 「情報公開」では、事務室からの新着情報が迅速に HP にアップされているが、教員は 57.8%（↓8.1%）、中等部保護者平均 57.0%（↓15.5%）、高等部保護者平均 64.2%（↓1.0%）とプラス評価は下がっている。しかし、生徒募集に関するメディア媒体の活用は、入試広報部の努力によって大きく改善され、生徒募集の好調につながった。

No. 6 の危機管理項目では、例年と変わらない高いプラス評価を得ている。本校独自項目の「初動対応の迅速さと適切さ」は、中等部生徒平均 64.3%（↓1.7%）保護者 67.9%（↓6.6%）、高等部生徒平均 61.8%（↑4.6%）保護者 74.6%（↓1.6%）の数値であった。関連して、No.10 「生徒理解」の本校独自項目「先生とのコミュニケーションが十分とれ、先生の指導に納得している。」の回答では、中 1 生 56.9%（↑1.4%）、中 2 生 73.7%（↓3.9%）、中 3 生 66.0%（昨年比↓6.0%）であり、中 3 保護者 58.7%（↓8.6%）は 6 学年の中で最も低い。特に、「初動対応の迅速さと適切さ」に対する数値が中 3 生 59.3%（↓11.0%）、保護者 57.6%（↓20.1%）のプラス評価が大きく下がったことは、学年団の構成（専任 2 名、常勤 2 名）にも要因があると考えられる。また、「個人情報の管理が組織的に行われているか」では、教員 82.3%・中等部保護者 90.5%・高等部保護者 93.0%と、いずれも昨年同様高いプラス評価であった。

## ② 教育内容

No.7～9は学力向上のための組織的な取組に関する項目である。No.7「授業を通じて学力がついていると感じる」は、中1年64.3%（↓3.3%）、中2年77.3%（↑2.3%）、中3年74.8%（↓1.7%）、高1年73.1%（↓1.7%）、高2年70.1%（↑0.3%）、高3年64.8%（↑7.8%）がプラス評価であった。教員側では学力向上の取組に66.7%（↓14.1%）とプラス評価を大きく下げてしまい、保護者の感じ方も中等部平均64.2%（↓5.0%）高等部平均67.6%（↓6.5%）と下がっている。

No.8「スローラーナーへの対応」は、本校の学校評価における積年の課題である。「成績低迷の場合に適切なフォローの仕組みがあるか」に対して、教員は71.1%（↓9.8%）のプラス評価であったが、生徒保護者の認識との差は開いたままである。本年度も中等部では、日常的な課題→点検→確認テストを柱に、家庭学習習慣の定着を最重要課題として、英国数の課題未提出者には居残り学習を実施し、粘り強く取り組んできた。その他、模試後の成績不振者に対する補習授業、定期考査前の教科別指名補習、高等部内部進学生に対する入学前学力補習によって、学力低迷層の生徒の原因である家庭学習習慣のなさを学校の時間で改善しようとした。高等部では、自主学習習慣を身につけるための指導に重点を置き、基礎学力の定着に向けた日常的な課題→点検と朝のモジュール小テスト、期末考査前の教科別個別質問会、模試後の学習面談、自習室の開設などを実施してきた。最も重点を置いた制度面での取組では、本年度の教育活動状況で記したとおり、高1年において中等部内部進学生のクラス編制を学習習熟度によって行った。これは生徒の理解度に合ったレベルと進度で授業が行われる環境を整え、学年全体での学力の底上げを狙ったものであり、その成果も学年全体の模試偏差値の下限値が45前後に上がってきている。

昨年度より生徒の学習実態をつかむために、新設したアンケートの独自項目「課題や提出物にまじめに取り組み、家庭学習習慣は身につけているか」の数値は、中1年61.8%（↓2.1%）、中2年79.1%（↑10.9%）、中3年77.7%（↑11.1%）、高1年76.6%（↑8.4%）、高2年63.9%（↓2.3%）、高3年64.8%（↓2.1%）がプラス評価であった。学年の進級後の動向を見ると、中等部生は平均11.6%プラス評価が増え、高等部生は2学年平均2.9%の減となっている。「成績低迷の場合に適切なフォローの仕組みがあるか」をクロス集計した結果では、

○成績低迷時のフォローがないと回答した者で、家庭学習習慣が不十分な者（H27・H28）

	中1	中2	中3	高1	高2	高3
H27	19/48	14/31	22/43	30/74	33/69	41/76
H27 重複%	39.6%	45.2%	51.2%	40.5%	47.8%	54.0%
H28	26/52	10/36	16/44	17/68	35/60	34/84
H28 重複%	50.0%	27.8%	36.4%	25.0%	58.3%	40.5%

学年が進級してからの動向をみると、中等部生では回答の重複率が減少している。また、高等部生の動向によれば、高1高2はまだ十分な自主学習習慣が身につけていない現状が伺われる。

授業というテーマでは、今年度もアンケート項目「興味や知的好奇心が刺激され、授業内容が分かりやすいか」と教員の意識としての「充実した ICT 環境を活用し、授業内容の工夫に取り組んでいる」との関連や、No.14「教員研修」の項目にある「本校は教員の資質向上、生徒の知的好奇心を喚起する授業構成のための校内外の研修体制が充実している。」のプラス評価を学校自己点検評価の大切なポイントとして上げたい。

教員アンケート「充実した ICT 環境を活用し、授業内容の工夫に取り組んでいる」では、84.4%（昨年度 89.4%）と今年も高いプラス評価である。生徒アンケート「興味や知的好奇心が刺激され、授業内容が分かりやすいか」では、中1年 58.5%（↓7.9%）、中2年 70.0%（↓2.6%）、中3年 63.2%（↑1.4%）、高1年 54.5%（↓7.2%）、高2年 62.5%（↓3.3%）、高3年 55.2%（↑4.5%）がプラス評価であった。本年度から中等部1・2年生に iPad を個人購入させており、授業での活用も拡大している。関連してNo.14「教員研修活動」の「校内外の研修体制の充実」に対して教員のプラス評価は 68.9%（↓5.5%）であったが、校務多忙な中で教員はアクティブラーニングや ICT 活用、授業法の改善などに努めている。「教員の資質向上、生徒の知的好奇心を喚起する授業構成のための研修」参加に加えて、校務分掌上必要な知識・技能の研修への参加も奨励し、SGH 推進部・進路指導学習指導部および人権教育が担当する特別支援教育の分野で研修が進んだ。

次に、生徒指導の面について述べることにする。重点目標②にも記したが、中3生、高3生の規範意識低下が目立ったことである。問題行動は中高ともに学校全体で極めて少ないが、中高の最上級生でこのような数値であることは、担任をはじめとして教員の日常的な指導が不足または浸透していないことを表したものと真摯に受け止めたい。初等部からの内部進学生に対する生徒情報の連携を抜本的に見直していきたい。「いじめへの対応」及び本年度法制化となった特別支援教育に関する対応では、人権教育主任を中心に生徒指導部が年間2回のいじめアンケートと支援を要する生徒のスクリーニングを精力的に実施し、いじめの防止と早期発見による迅速な対応、支援対象生徒への個別指導計画の策定に取り組んできた。教員のこの問題に対する取組に関するプラス評価は 97.8%と高く、生徒のプラス評価は中等部生徒平均 67.3%（↑0.3%）、高等部生徒平均 61.1%（↑0.8%）であったが、保護者のプラス評価は中等部平均 70.1%・高等部平均 82.3%と高いものであった。

最後に、「学校間連携」についてまとめる。初中高大を一貫する内部進学制度を持つ本校においては、中等部と高等部との連携は職員室が合同であることもあり比較的円滑に進んでいるが、中等部生徒への高等部理解という点で不十分な面が明らかになった。また、懸案である初等部と中等部との連携では重点目標③に記したように、内部進学指導に関して初中双方で抜本的な改善に取り組まなければならない時期に来ている。

中高等部と関西大学との連携は、高等部の SGH に対する関西大学の支援について、本年度その体制と実務を協議する場が設けられた。本校としてはこの動きに大いに期待するものであり、高等部の課題研究に関する実務的な課題の解消や、関西大学での併設校出身者のアドバンテージを学力面で創出する可能性を次年度から本格的に探りたい。

## 5 学校関係者評価委員会からの評価結果

### (1) 自己評価の結果を受けて

#### ア 重点目標①【初中高一貫教育の後半を担い、確かな学力を養うことによって、各自の進路希望を実現させる】について

家庭学習の定着という課題は、中等部生は特に SNS やゲームに費やす時間に家庭時間が割かれるという現状をどのように解決するかにある。SNS については保護者もよく活用しており、家庭でのルールづくりを親子で話し合える環境を促したい。中学生段階で子どもの自主性を重んじるためには、子どもの精神的な成長を保護者と学校が見極めた前提でのものであり、家庭と学校との密なる情報交換が不可欠となる。そのため中学生時代の家庭での生活に対しては、保護者側からの子どもに対する働きかけが一定必要とならざるを得ない。また、中等部では通塾生徒が多数おり、塾の宿題の多さで学校の課題を完成できない状況も見受けられる。学校からの課題→点検→確認という取組は、教科間での量の調整を図りながら継続していくべきである。

#### イ 重点目標②【関西大学の併設校出身であることにプライドを持ち、国際的な視野と思考力・探究力を備えた「関西大学への推薦にふさわしい人物」の育成】について

高等部の各行事や自主性の取組については、充実していると感じる。しかしながら、保護者に対しての情報発信が不十分であると感じる。在校生保護者は、教員とコミュニケーションを取る事を望んでいるので、意見があれば学校に申し出てもらうように姿勢を示し、保護者からも応援してもらえる組織作りが大切である。

#### ウ 重点目標③【初等部からの内部進学を円滑に進め、初中高から大学への内部進学指導をより実態に即し充実させる】について

通塾生が多いことに驚いている。予備校では、高等部の卒業見込者入試（内部進学入試）合格者が、難関国立大学や関大には無い学部（医・歯・薬など）がある他私学を受験している人数が多い点で、3 併設校のうち高等部を勧めていると聞く。関西大学はどのような取組を行っているか、上手く広報する必要がある。大学での取組を示すことは、意欲の高い優秀な学生（生徒）確保の準備であるはずであるが、大学教員はそのように捉えていないのが現状である。

初等部から中等部への進学者のうち、中等部から高等部へ進学しない者が多い原因は何か。中等部・高等部での学びとは異なる勉強をしたい生徒はいると思料するが、成績上位者が高等部よりもレベルの高い学校へ進学している傾向がある。進学しない理由や時期などアンケート等を通じて、学校として内部進学に対する進路指導を検討してもらいたい。在籍生徒全員が、高等部から関大へ進学しなくてもよいと思うが、初等部からの内部進学生が次年度から高等部へ上がることを考えると、初等部教員と中等部教員の間で生徒に関する情報の引継ぎがまだ不十分である。

### (2) アンケート結果について

概して、中等部高等部の各行事や取組については、充実していると感じる。生徒達は、喜んで主体的に自主性を持って行動していると思う。生徒たちの学校への満足度が今年も高い



数値であったことは評価したい。しかし、教員による職場への満足度が低くなった点は、校務組織改革に対する戸惑いと、解消されにくい業務量の多さに対する不満にあると考えられ、そのムードが保護者の満足度に影響しているようである。公立学校でも教員の負担増については、問題になっており、教員数に応じて業務や行事をスクラップすることも大切である。一般企業においても長時間労働が問題となっており、学校現場にもより一層の労務管理が求められている時代である。

[学校関係者評価委員会委員名簿]

氏名	所属及び役職
沖田 厚志	高槻市中学校校長会 会長
長尾 忠浩	関西大学中等部・高等部教育後援会 会長
小澤 守	関西大学社会安全学部 教授 ※評価結果とりまとめ執筆者
鵜飼 昌男	関西大学中等部・高等部 校長

## 6 校長の意見書

関西大学中等部・高等部

校長 鵜飼 昌男

指示命令系統の明確化と近い将来の世代交代に備えた校務組織の改編に対して、教員間の戸惑いや部署間での連絡相談報告が円滑に進まなかったこと等により、校務運営と業務の削減が意図したレベルに達しなかったことは残念であった。そのため、本年度の学校評価アンケート結果は、昨年度より更にプラス評価を下げてはいるものの、高等部の進路実績は開校以来最良の結果となり、中高の生徒募集においても志願者増となったことは幸いであった。

本年度最も衝撃的であった事柄が重点目標③の数値である。初等部からの初の内進生が中等部三年生となったものの、高等部への進学を辞退する者が予想以上に多くなった。初中高の内部進学制度がもたらす本校の新たな状況を我々に強く認識させた。初等部との連携のあり方を根本的に見直し、中等部生徒に対する高等部理解のための進路指導の必要性について、喫緊の課題として既に年度末から次年度に向けて取り組んでいる。

次に、重点目標①とした「中等部における家庭学習習慣の定着」に関しては、学力推移調査のデータを見ても中等部3年間で向上していないことが分かり、中等部入学後も半数以上が塾を続けている実態を考えると、自主学習習慣に切り換えていくことの難しさを感じる。生徒指導の面からも初等部との連携をとる必要があり、中等部の日常的な授業と宿題の関係を再検討していかなければならない。保護者には家庭でのSNSやゲームに対するルール作り等、家庭で担う生活習慣の指導を改めて訴えていきたい。

三つめに、重点目標②と③に関係する「生徒の関西大学への理解」について、学校の取組を質的に改善していく必要を感じる。関西大学に対する帰属意識や関西大学進学に対するモチベーションの向上を図るため、学校が主催する行事的な仕掛けだけでは限界があり、大学からの情報提供の量と質を変えていかなければ、これ以上の発展は見込めないと考える。併設校として本校が求めるものは、関西大学各学部の学術成果や教員の専門性紹介、卒業生の就職や大学生活に関す

る情報であり、少なくとも関同立との違いを本校教員が生徒に語れるための情報である。教員に対する関大理解研修や併設校卒業生の大学生活状況のフィードバックなど、広報的な情報面での高大接続を進めていく必要がある。

Kandai Vision 150 にも記したが、併設校出身者のアドバンテージ創出が関大と併設校の将来的な発展を担うと考える。

## 7 アンケート結果

2016 年度 関西大学高等部・中等部点検評価・評価アンケート集計

以 上

対象 教員45名

生徒

中1生:123名、中2生:110名、中3生:103名(合計:336名) 高1生:145名、高2生:144名、高3生:145名(合計:434名)

保護者

中1生:98名、中2生:84名、中3生:92名(中保合計:274名) 高1生:123名、高2生:123名、高3生:128名(高保合計:374名)









